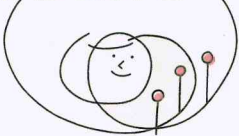


Life 社会保障

ゆっゆっLife



深澤立医師(左)が最初に受け持った末期がんの患者は、病院では点滴だけだったが、家ではカレーライスを食べられたという
—横浜市都筑区の深澤りつクリニック



外来も訪問もする医師評価

病院や診療所にかかったときの治療費や薬代、検査費などの価格にあたる診療報酬が、4月から変更される。厚生労働省は、紹介状なしで大病院を受診したときの患者負担を拡大する一方、「かかりつけ医機能」を充実。「外来」にも「訪問」にも対応する医療機関の評価を引き上げる。患者の生涯を通じて伴走するかかりつけ医を増やしたい考えだ。(佐藤好美)

「かかりつけ医機能」充実



療や介護職と連携—することなどを指す。厚生労働省は4年前の診療報酬改定で、かかりつけ医機能を評価する仕組みを作った。だが、要件の1つの在宅医療の提供などによる「24時間対応」がハードルになっており、この報酬を

受ける医療機関は診療所の5%程度にあたる約5500カ所(平成28年)にとどまっていた。このため、今回の改定では要件を緩和。24時間対応は、他の医療機関との連携で確保しても良いこととし、連携した場合の報酬を新設した。また、外来にも訪問にも携わる医師を評価する観点から、外来患者の状態が悪くなって通えなくなった後も、引き続き訪問して診療する医師を評価。こうした患者が一定数以上の医療機関への報酬を新設した。予防から看取りまで継続して診療するかかりつけ医の普及を目指す。

診療所間の連携を模索

「新報酬、突破口になるかも」

川崎市に住む女性(71)は、昨年夏、同居の母親(89)を自宅で看取った。母親は要介護2で軽い認知症があったが、前日までは普段と変わらぬ様子だった。だが、いつものように「朝ご飯よ」と起こしに行くと返事がなく、室内に入ると母親はすでに呼吸がなかった。

それまで母親が診察に通ったり、来てもらったりしていた開業医にあわてて電話をすると、医師は外来の始まる前に来てくれた。母親の状態を慎重に確認し、死亡診断をした。

急逝だったが、スムーズに在宅看取りができたのは、亡くなった母親に定期的な診療を受ける医師がおり、その医師が緊急に訪問してくれたからだ。「日頃の診察」と「臨時の訪問」がそろわないと死亡診断は難しい。事件の可能性も否定できず、警察が介入してしまつたこともある。

女性「突然のことだったが、病院ではなく住み慣れた家に最後までいられたのは幸せだったと思う」と振り返る。

開業医らに「在宅を始めませんか」と誘うが、訪問に携わる医師が増えた実感はない。「2025(平成37)年には(体制整備は)間に合わないのではないか。将来は、(警察の検視が増えるなど)看取りはもっとドライなものになるのかもしれない」と悲観的だ。

国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」によると、2025年には年間の死亡数は現在の約134万人(平成29年)よりも約20万人増え、「多死時代」を迎える。だが、厚労省の資料では訪問診療を行う医療機関は、10年前からそれほど増えていない。全国で約10万カ所の診療所の2割にとどまる。

医療的ケア児に看護を拡大

小児の在宅医療では、医療技術の進歩で人工呼吸器などをつけて家で暮らす「医療的ケアの必要な子供」が増えている。だが、高齢患者の医療環境に比べると対応できる医療職も少なく、特に母親の看護負担が過重になっている。今回の改定では、長時間の訪問看護を週3日まで使える患者の対象を、医療的ケアの必要な子にも拡大した。

しかし、実効性には早くも疑問の声が上がる。東京都内で、酸素の管理や頻繁なたんの吸引を必要とする娘を看護する母親(45)は「訪問看護ステーションは看護師不足で、わが家も本当はもっと来てもらえるはずなのに、実際には利用できない。ショートステイも同じ状況。対象が拡大されても、利用時間が本当に長くなるかどうか分からない」と懐疑的だ。

都会の高齢化はさらに深刻だ。横浜市によると、同市で2025年に、病院ではなく自宅や施設で最期を迎える人は、5年前を基準年として2.4倍になる見通し。これまで訪問をしなかった診療所にも、かかりつけの患者が通院できなくなった患者宅に向き、最後まで診てもらうことが必要になっている。

横浜市医師会は昨年度から、訪問診療の経験のない開業医が、ベテラン在宅医の訪問診療に同行する「在宅医養成研修」を始めた。まずは、経験のない医師に、「週1回」などの定期的な訪問診療を始めようというのが狙いだ。さらに、高齢の開業医も多いため、負担の重い土日や深夜など緊急の訪問や看取りには、他の医師が駆けつける仕組みも模索中。今年2月には都筑区医師会など3区医師会で、主治医が学会出張で対応できないときに、他の医師が代わりに出向く「在宅看取りバックアップシステム」のモデル事業も始めた。

今回の診療報酬改定が、こうした取り組みを後押しする方向になったことに、深澤医師も期待を寄せる。「外来から在宅に移行した患者が一定数いる医療機関を評価するなど、国はがんばって考えている。日本医師会が始めたかかりつけ医の研修も盛況だった。ひょっとしたら、突破口になるかもしれない」。都会では「大病院の教授がかかりつけ医」と考える人もおり、患者の理解も進んでいない。だが、大病院では治療が終われば退院を求められる。一方、なじみの開業医がいても、訪問には対応していかないかもしれない。深澤医師は「患者さんがかかりつけ医に『先生、私を看取ってね』と言ってみてほしい。医師は患者からの言葉に一番弱いものだから」と話している。

MOSTLY 3 vol.250 MARCH 2018
<http://mostly.jp> モーストリー・クラシック CLASSIC

クラシック 小品の楽しみ

「G線上のアリア」
「ハンガリー舞曲集」
「スラヴ舞曲集」
「こうもり」序曲
「威風堂々」
「くるみ割り人形」組曲
「ウィリアム・テル」序曲
「愛の喜び」
「愛の悲しみ」

購読のお申し込みは、書店、またはお近くの産経新聞販売店へ。
お近くに書店がない場合は編集部まで
03-3547-6303(月)金曜 10~18時。

毎月20日発売定価 1,030円(本体954円) 発行・産経新聞社 発売・日本工業新聞社